

カンボジア訪問を振り返って

アジア経済交流センター長 鎌田 慶昭

2025年7月、念願だったカンボジア（プノンペン、シハヌークビル）訪問が実現した。

ASEAN 諸国の中でも、当国は決して認知度が高いとは言えない。当国の誇る世界遺産アンコール・ワットがあまりにも有名な一方、それがカンボジアに位置することさえ認識されていないケースもある。ちょうどバリ島とインドネシアが結び付かないように。アンコール・ワットが有名であっても、そこがカンボジアを代表しているとは言えない。

今回は経済の中心地である首都プノンペン、そして唯一の深海港を有するシハヌークビルでの見聞を通して、現在のカンボジアの活況と魅力をお伝え出来ればと思う。

I. カンボジア豆知識

最初に、カンボジアに関する小ネタのいくつかをご紹介します。

a) 長い歴史を持つ日本との国交

正式な国交樹立が1953年で、ASEANでは1887年のタイに次いで古い。

因みに、他のASEAN主要国との国交樹立は、フィリピン：1956年、マレーシア：1957年、インドネシア：1958年、シンガポール：1966年、ベトナム：1973年であった。

交易に限って見れば、その歴史は遥かに古く、江戸時代初期（17世紀初）の朱印船貿易までさかのぼる。

b) かぼちゃ（南瓜）の語源はカンボジア

16世紀にポルトガル人が豊後に漂着し、持参した南瓜を大友宗麟に献上したと言われている。産地がカンボジアだったことから「かんぼちゃ」と呼ばれ、やがて「かぼちゃ」になったという。プノンペンのスーパーに並ぶ南瓜は茶色味がかっており、直径40cmの大物もあった。

c) 迅速なコロナ予防対策

少し古い話になるが、コロナ禍の時期、カンボジアではいち早く予防接種が進められた。中国SINOVAC製の不活性化ワクチンが主であったが、素早く接種を徹底させた事が奏功し、2021年11月26日の時点で、100人当たりの感染者数累計が0.77人と、ASEANの他国を凌いでいた。

（参考：インドネシア：1.57人、マレーシア：7.92人、タイ：3.00人、フィリピン：2.60人、シンガポール：4.55人、ベトナム：1.20人（出典：日経ビジュアルデータ））

II. プノンペン到着

日本から当地への直行便は無く、成田からホーチミン経由でプノンペンに到着した。ホーチミンでのトランジットも含め、所要時間は約9時間30分だった。

到着ロビー正面のタクシー乗り場を素通りして、その先にあるGrab Taxi専用乗り場へと向かった。因みに、Grab Taxiはシンガポール発祥の配車アプリであり、ほぼASEAN全域で使用可能である。当国では乗用車か3輪のトゥクトゥクを選択でき、土地勘の無い者でも間違いなく目的地に辿り着ける。料金は手配時に確定しており、乗車後に登録済みのクレジットカードから自動的に引き落とされるので、煩わしい料金交渉は一切不要である。



空港のGrab Taxi 乗り場

Ⅲ. プノンペン市内

急速な進歩を続けるプノンペンの街は様々な側面を合わせ持っており、それらのどれもが魅力的に感じられる。高層ビルが立ち並ぶオフィス街、巨大なショッピングモール、雑然とした昔ながらの街並み、そして随所に見られる美しい緑とクメール王朝文化の繁栄を感じさせる建造物などが私達の目を楽しませてくれた。

到着した翌朝から、その美しい緑と伝統的な建造物にいきなり遭遇したのである。

a) ワット・ブノン (Wat Phnom)

プノンペンに到着した翌朝、宿泊中のサンウェイ・ホテルの周辺を散策してみた。

ホテルのすぐ側に広い公園があり、足を踏み入れてみると、そこは静かな市民の憩いの場であった。そこがワット・ブノン（山の神）という名高い観光スポットであるということを知った。小高い丘を登り本堂に近づくと、伝統楽器ピン・ペート (Pin Peat) の柔らかな音色が流れており、参拝者の心を和ませてくれる。



ワット・ブノン正面

b) バタナック・キャピタル・タワー (Vattanac Capital Tower)

宿泊中のホテルから徒歩圏内に、プノンペンを代表する高層ビルがそびえ立っている。

そこはカンボジアの老舗財閥バタナック・グループの拠点で、オフィス、商業施設、レストラン、ホテル等が集う複合施設である。

その一角をなす「バタナック・ライフスタイル・キューブ」には、今回訪問させて頂いた JETRO プノンペン事務所、及びカンボジア日本人商工会 (JBAC) が入居している。



バタナックビル群の外観

c) 大型商業施設

2014年のイオンモール1号店開業を皮切りに、カンボジアの小売市場は急速に拡大した。

現地の主要財閥であるチップモン (Chip Mong)、ラッキーマーケット (Lucky Market)、バタナック (Vattanac) 等が次々と大型モール開発に参入し、現在ではイオン3店舗を含めプノンペン市内で15店舗以上開業しているという。

イオン進出が現地市場に与えた影響は大きく、カンボジアの小売市場を語る上で、「イオン以前 (Pre-Aeon)、イオン以後 (Post-Aeon)」と表現されるほどで、同社が当地の潜在需要を喚起し、市場を創造したと言えよう。

今回はイオン2店舗 (1号店、3号店)、チップモン及びラッキーの各店舗を見学した。



ラッキー・パビリオン・モール



同モール内 ラッキー・スーパー

平日のせいか、イオン以外のモールはさほどの賑わいがなく、既にオーバーストアなのでは？と思わせるほどだった。現地資本のモールも大規模かつ立派な造りだが、イオンとの間に明確な差異が随所に認められる。特に、精肉や鮮魚のカット販売サービス、自社ブランド（トップバリュ）を含む充実した品揃え、効率的な売場レイアウトと分かりやすい導線設計などはイオンの強みだと感じられた。また、日本食材の豊富なバリエーションは特筆すべきで、一瞬、日本国内の店舗かと見紛うほどだった。



イオン1号店スーパー店内



イオン3号店店内

見学した店舗の中には、現地で人気の高いホクレンの牛乳の試飲販売が実施されている店舗もあり、そこで特別にお願いして富山の羊羹の試食プロモをさせて頂いた。アンケート結果は「好き」30%、「嫌い」5%と、ますますの評判だった。



ホクレン牛乳試飲販売 & 羊羹試食

d) 富山発信の「食」

1. 「雅楽」和食レストラン

富山で複数の飲食店経営の実績を持つ米陀安弘社長は、11年前に家族と共にプノンペンに移住し、当地で和食レストラン「雅楽」を開店した。各国の大使館や高級住宅が並ぶトンレバサック地区に位置する同店は、今ではプノンペンで最も高い評価を受ける和食処の1つとなっている。ランチメニューから選んだ「刺身御膳」は、富山を思い起こさせる鮮度と質で、カンボジアに来ていることを忘れるほどだった。



ランチメニュー

2. a.pont pie (アー・ボン・パイ)

プノンペンで今、新たなスイーツとして注目を集めているのが、富山市の「株式会社ジェック経営コンサルタント」が手掛けるアップルパイである。同社は当地にて日系及び現地企業の経営支援を主軸としていたが、コロナ禍による事業環境の悪化を機に、富山県産のコラーゲン・ドリンクの輸入と共に、アップルパイの製造事業の開始に踏み切った。甘党は多いがパイの知名度が低いという市場の空白をねらい、同社事務所が入居するビル1階の路面店、及びイオンモール等の商業施設内で販売を展開している。

青森産のリンゴや特製生地など、主原料は日本からの輸入であり、価格はやや高めだが生地のサクサク感と内側のまるやかな甘みの組み合わせが好評である。



a.pont pie 外観、内部

e) ナイトマーケット

ホテルから程近いトンレサップ川沿いのナイトマーケットは、地元の若者や観光客で賑わっていた。多種多様な屋台や、衣類、履物、アクセサリ類、カンボジアの伝統工芸品の店が軒を並べ、中央ステージの音楽ライブが雰囲気を盛り上げていた。



ナイトマーケット

IV. シハヌークビル訪問

a) 港湾と経済特区 (SEZ)

プノンペンから南へ約 220km、車で約 3 時間の距離に位置するシハヌークビルは、カンボジア唯一の深海港を有する物流の要衝である。当地経済特区管理事務所で顧問として長年勤務している知人の薦めもあり、最終日に当地を訪問した。当日は生憎の土砂降りで視界が悪く、特区内の見学は思うに任せなかった。

港湾、及び経済特区 (SEZ) の建設、運営には日本政府が深く関与しており、当港は年間貨物取扱量 130 万 TEU (神戸港の約 50%) を誇る巨大港へと成長を遂げた。同港のコンテナ・ターミナルのキャパ拡大、東南アジアの物流拠点としての更なる機能向上に向け、日本政府の援助は今も続いている。

一方、経済特区の方は空き地が多く、日本からの進出も王子ホールディングス (段ボール製造) とイオンモール (倉庫業) の 2 社のみで、特区内の一部は、コンテナ・ターミナルからはみ出したコンテナの置き場となっている。消費市場が拡大している一方、製造業等の産業が伸び悩んでいる為、消費財の輸入は多いが生産財の流通が限定的という当国の現状が垣間見える。



経済特区管理事務所入り口

b) カジノとリゾート開発

シハヌークビルは 2013 年頃から中国資本の急激な流入とカジノ景気に沸いたが、2019 年のカンボジア政府によるオンライン・カジノ禁止令と、その後のコロナ禍により状況は一変した。建設途中のままでは放置されたビルが建ち並び、一部では特殊詐欺グループの温床ともなる等、治安の悪化が懸念された時期があった。

しかし今は、これまでの暗いイメージを払拭し、再生に向け新しい局面を迎えようとしている。中国資本を主体とした健全なリゾート開発が加速する中、現地では持続可能な成長を支えるパートナーとして、日本からの投資に強い期待が寄せられている。

V. おわりに

a) 負の部分

これまではカンボジアの光の側面ばかり紹介したが、この国が抱える「影の側面」を避けて通る訳にはいかない。こうした負のイメージこそが、カンボジアに対する関心の低さの一因となっている筈である。

1. ポル・ポトの独裁

1975 年からの 4 年間、ポル・ポト率いるクメール・ルージュは極端な原始共産主義を標榜し、都市文明や宗教を徹底的に破壊した。農村への強制移住に加え、知識層や反体制派と見なされた人々、眼鏡をかけているというだけでも次々と粛清された。国民の 4 分の 1 が犠牲となったこの惨劇は、全土に点在する処刑場「キリング・フィールド」として、今もその惨劇の傷跡をとどめている。

2. 不発弾

ベトナム戦争(1950年代後半～1970年代半ば)やポル・ポト政権崩壊後の内戦が残した負の遺産として、地雷や不発弾が、今なお人々の命を脅かし続けている。日本政府はこの深刻な事態を受け、現在も継続的に不発弾処理や地雷撤去の支援活動を展開している。

3. 特殊詐欺グループの潜伏

特殊詐欺に関与している日本人が現地で拘束され、日本に送還されたニュースは記憶に新しい。現在、カンボジア政府は「詐欺根絶」を国家目標に掲げており、日本警察との緊密な連携により、拠点の摘発を強力に進めている。

4. タイとの国境紛争

2025年7月に激化した両国の衝突は、10月にトランプ大統領等の仲介により一旦は和平合意に至った。しかし、12月に紛争が再燃したため、改めて停戦合意が交わされた。

2026年1月現在、戦闘は概ね収束しているものの、国境地帯は依然として緊迫した状態が続いており、タイとの陸路物流は途絶したままである。

b) プノンペン訪問の動機

私がカンボジア訪問を強く念願した理由の1つは、かつて偉大なるクメール王朝が築き上げた壮麗な文化への憧憬と敬意である。約20年前にアンコール・ワットを訪れた時の感動は今も忘れられない。一方、シエムリアップから15kmほどに位置するトンレサップ湖で目にした、無国籍の人々が送る極貧の暮らしに新たな衝撃を受け、その光と影の対比が、私の記憶には深く刻まれている。

そして2つ目の理由は、JETRO プノンペン事務所が配信するYouTubeを通じ、首都プノンペンの目覚ましい発展を目の当たりにしたことである。かつての記憶とは異なる、繁栄する「新しいカンボジアの顔」に、強く惹きつけられた。この国の力強い成長曲線に乗り、自分達に何ができるか。そのヒントを探るべく、まずは自身の目による現地の見学を切望していた。

c) まとめ

プノンペンの街並みは、近代的な都市インフラとクメールの伝統美が共存する、極めて魅力的な空間だった。



クメール様式の内務省庁舎

そして特筆すべきは当国の人口動態であり、少子高齢化に直面する日本とは対照的に、街には若年層や子供たちが溢れ、国全体の力強い生命力が感じられた。いずれのモールにも子供の遊び場が十分に確保されており、子供達を大切にしている姿勢が窺われた。

経済発展に伴う貧富の差は顕在化しつつあるが、低所得層(と思われる)人々の表情にも、何となく精神的な余裕と矜持が感じられる。鼻眞目かも知れないが、それはこの国が歴史的に積み上げてきたクメール王朝文化の誇りの一端なのではないだろうか。

ビジネスの観点では、中国資本の進出が先行しているものの、現地の親日感情と日本ブランドへの信頼は想像以上に強固であった。市場はまだ小さいが、これは見方を変えれば広大な「伸びしろ」であり、この国の比較的低い参入障壁を考え合わせると、当地での事業展開を検討する価値は十分にあると思える。